
ピカ子、その愛

案山子山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピカ子、その愛

【Nコード】

N1428D

【作者名】

案山子山

【あらすじ】

辛い旅をしているつもりのピカ子。しかし彼女は同じ場所にいた。

おひさまは、今日もにっこりと微笑んでいる。けれど、ピカ子の心はどんよりと曇っていた。

「なんて、憎たらしいおひさまなの」

ピカ子は、おひさまを見上げながら呟いた。

おひさまには、ピカ子の声など聞こえはしない。尚も満面の笑みで、ピカ子を照らし続けている。

ピカ子が旅に出てから、もう幾日が過ぎたことだろう。それ以来ずっと、ピカ子の心は曇ったままだ。

曇った心でおひさまを見上げた。ピカ子は、ふいに目眩を起こした。目の前がゆらりと揺れて、まるで陽炎の中にいるような錯覚にとらわれた。気が遠くなるようにさえ思えた。

そのとき、その陽炎の中に突然、見慣れた顔を見た。それも笑っている。

「ボクだわ……」

ピカ子は思った。

ピカ子が見たボクの笑顔は、あの日のまま、変わらない。そしてピカ子は、胸が悪くなるのを感じた。

「どうして、ここにいるの？」

ピカ子がそう問いかけたとき、陽炎に浮かぶボクの笑顔は、一瞬にして掻き消されてしまった。

夢を見たのかとピカ子は思った。

ボクの笑顔が幻であることは言うまでもない。だが、ピカ子は立ちっても尚、ボクのことを忘れることができないでいたのだ。

「もうイヤだわ……」

ピカ子は呟いた。

行けども行けども、変わらぬ景色。ピカ子の心も、それと同じだ。ただ同じ処を回り続けている気がした。

そのとき突然、辺りの景色が大きく揺れ、ピカ子の体が、ふわりと宙に浮いた。

目の前に、巨大なボクの顔がある。そして、ボクの声が響いた。「ハムスターのゲージ、ベランダに出したままだった。こんなところでカラカラ回って、よく平気だね」

ピカ子には、ぼくの言葉の意味が理解できなかった。

「エサの時間だよ」

その響きだけは、とって心地よかった。

ピカ子は旅を止め、ゲージと言われる柵にかじりついた。それは、さっきまでの憂いとは裏腹に、生きようとする本能だけの行動だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1428d/>

ピカ子、その愛

2010年11月28日03時43分発行